

[009]九州人類学会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2232283>

出版情報：九州人類学会報. 9/10, 1982-06-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



序

九人研が正式に発足したのは昭和47年9月のことであったから、間もなく十周年を迎えることになるわけである。もっとも、これは私だけのことかもしれないが、九人研は月例会を中心とした研究活動組織であるためか、この会の活動を「年」という単位でとらえる感覚に乏しく、毎月の例会を着実に重ねているうちに、ふと気がついたらいつの間にか10年たっていた、という感じである。しかし、「十年ひとむかし」というから、この間滞りなく会の活動が継続できたということは、やはり、もって銘すべきことであろう。発足当初からこの会に関わってきたひとりとして感慨無量である。

この10年間に、会員数は急増とは言えないまでも、毎年少しずつ増え、最近では100名以上の線を維持している。そして、例会活動は毎月コンスタントに30名内外の会員の出席を得、この10年間1回も休まず続けられ、会報も続刊されてきた。これらは、事務局や例会・会報担当の運営委員各位の献身的努力の賜物であることは言うまでもない。しかし、そうした努力も初代会長の綾部恒雄先生のすぐれたリーダーシップと共に、発足以来今日まで毎年、学会の乏しい財政の中から例会活動援助金を支出して頂いている日本民族学会をはじめ、集中講義や調査などで来福された折に、例会での特別講演等にご協力いただいている関東・関西方面在住の日本民族学会会員諸氏のご厚意に支えられたものであることを忘れることはできない。この機会に特に記して感謝の意を表したいと思う。

今号はご覧のとおり、9号と10号の合併号となった。本来は毎年刊行するのが望ましいのであるが、諸種の事情からこのような形になったものである。とりわけ昨今の通信費・印刷費の高騰が毎年の刊行を困難にしている原因の一つである。財政難という問題は、こういう小さな自主的団体の宿命というべきものであろう。発足間もないころの九人研の運営委員会で、この会報刊行企画が検討に付されたとき、九人研は月例会の充実が第一であって、会報刊行のような二義的なことは乏しい財

政の小さな研究会のやるべきことではない、との意見が出されたこともあった。しかし、10年たってみると、こうしたささやかなものでも会活動の記録として残してきたことは決して無意味ではなかったと思う。今後も、たとえやりくりをしても続刊の努力を重ねて行くべきだという思いが強い。

肝心の本会報の内容については読者諸賢のご批正をまつしかない。今後は、掲載論文へのコメントを付すなど、内容の充実をはかることが課題であると思われる。なお、先号からは、例会発表論文要旨だけでなく、投稿論文も掲載することにしてるので、会員諸氏の活発な投稿を期待するものである。

昭和57年初夏

九州人類学研究会会長

江 渕 一 公